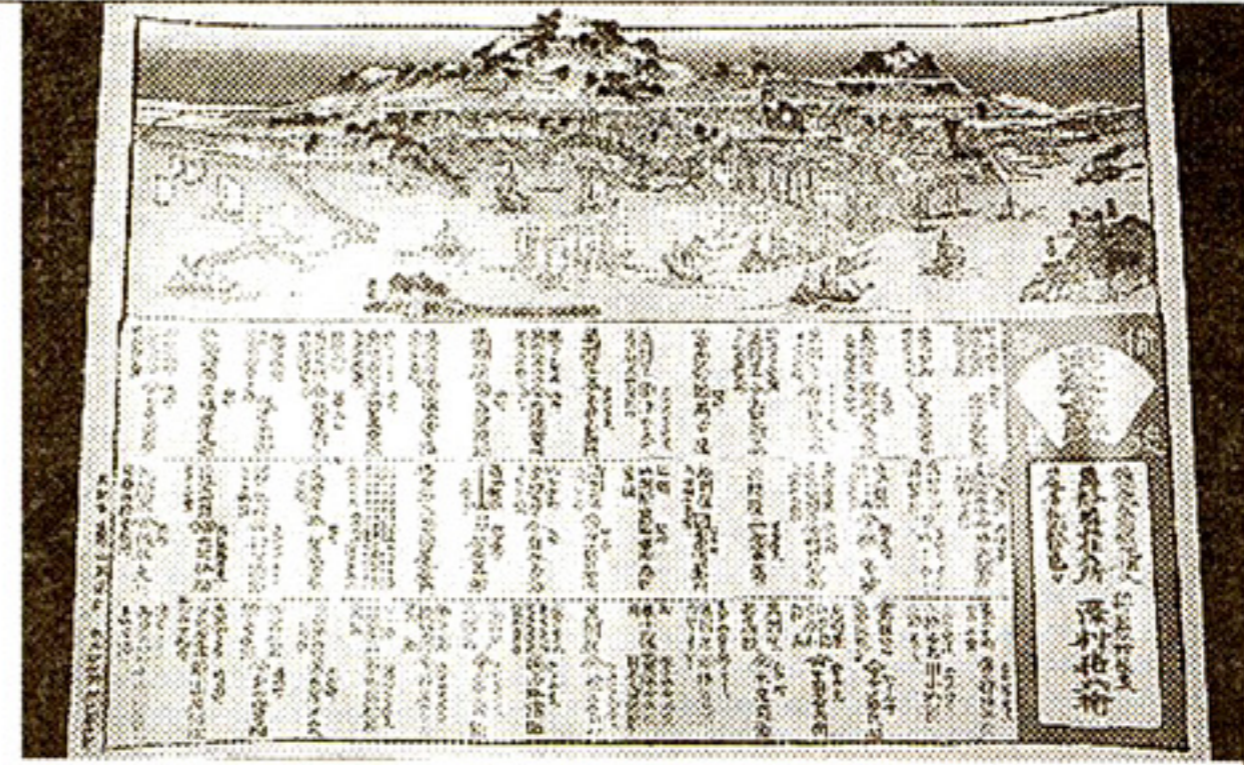


200年企業

—成長と持続の条件—

「鞆の浦」とともに商う

岡本亀太郎、350年目の新製品



明治10年の引札

広島県福山市の中心部から南へ車で約三十分。瀬戸内海に面した鞆の浦は万葉の時代から「潮待ち港」として栄えた。江戸期の朝鮮通信使が「日東第一形勝」

明治十年（一八七七年）ごろに作られた鞆の浦の地元商店の広告チラシ。当時は「引札（ひきふだ）」と呼ばれた。澤村船具店（旧商号「深津屋」）の五代目澤村猪兵衛が発起人で四十八店主が名を連ねた。掲載画は鞆港の俯瞰（ふかん）図で一八八四年の台風で崩落した常夜灯などが描かれている。七代目猪兵衛氏が一九七〇年代半ばに蔵の中で発見し複製した。

（朝鮮の東の場所でも美しい景色）と絶賛した港の景観や街並みは世界遺産の候補地にもなっている。

観客動員千二百万人に達した二〇〇八年最大のヒット映画「崖の上のポニョ」。

鞆の浦ファンの広がりや飛躍の機会ととらえる老舗企業はほかにもある。一八

五五年創業の岡本亀太郎本店（同）。備後福山藩御用酒として伝わる「保命酒（ほろめいしゅ）」の醸造元である。保命酒は漢方医の中村吉兵衛が一六五九年に開発。独自に醸造したミリンに生薬を配合した。

明治に入り中村家が廃業。清酒醸造で創業し中村家と懇意だった岡本家が保命酒の醸造道具一式や竜の彫り物が施された飾り看板などを受け継いだ。岡本家は一時は炭坑や海運も手がけるほど多方面に事業を拡大したが、昭和の金融恐慌

で経営が傾き傘下の事業の多くが身売りの対象となった。岡本亀太郎本店は清酒業から手を引き、その後は保命酒の醸造元として細々と命脈を保ってきた。

現在の店主は五代目の岡本憲良社長。長男で六代目の良知専務は一九九二年に米フィンドレー大を卒業後、合同酒精に入社。営業マンとして勤務した後、二〇〇〇年に岡本亀太郎本店に入った。良知氏は「観光土産需要に頼った路線では先が見えている」と、抜本的な製品見直しに着手。〇

五年に保命酒を梅酒仕立てにした「梅太郎」、〇六年にはアンズを使う「杏子姫」という姉妹品を発売。保命酒では約三百五十年ぶりの新製品を世に送り出した。史跡として名高い鞆の浦

のイメージに重ねようと保命酒にまつわるエピソードの発掘も心がけた。幕末の老中阿部正弘は福山藩主でもあり、伊豆下田（静岡県下田市）に來航したペリーを幕府が接待した宴席で福山の特産品、保命酒がふるまわれたとされた。良知氏は昨年、下田市の図書館に保存されている文献などで事実を確認。來日したペリーの子孫に保命酒を贈るなど話題作りにつなげた。

岡本亀太郎本店の〇八年九月期売上高は五千四百万円。新製品や話題作りが実を結び、この五年間で二〇%伸びた。「次世代に残せるものが見え始めた」と語る良知氏。地元鞆の浦への関心の高まりが今後相乗効果となることを期待している。（編集委員 安西巧）

る。 （編集委員 安西巧）